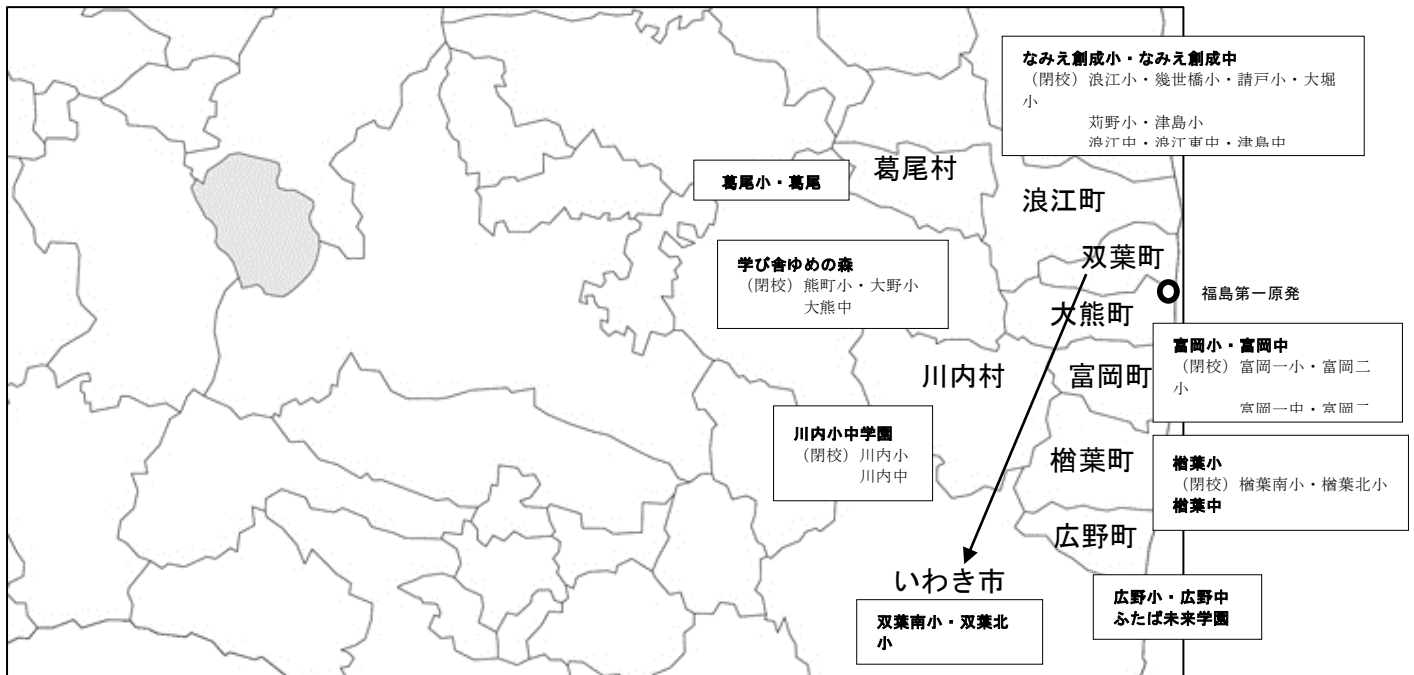


「ふくしまの今」 ～ 双葉支会の現状 ～

双葉支会

I 双葉郡内 8 町村の小・中学校の現在（令和 6 年 1 0 月 1 日現在）



	小学校	中学校
本校で再開した学校	葛尾小・広野小	檜葉中・広野中
新設された学校	なみえ創成小 (旧浪江東中に新設)	なみえ創成中 (旧浪江東中に新設)
		ふたば未来学園中
	富岡小 (旧富岡一中に新設)	富岡中 (旧富岡一中に新設)
	檜葉小 (旧檜葉南小に新設)	
	学び舎ゆめの森（義務教育学校） (会津若松市に新設→R5年度に大熊町で再開)	
	川内小中学園（義務教育学校） (川内小に新設)	
他校で再開している学校		葛尾中 (葛尾小で再開)
閉 校	浪江小・幾世橋小・請戸小 大堀小 荏野小・津島小・熊町小・大野小 富岡一小・富岡二小・川内小・檜葉南小 檜葉北小	浪江中・浪江東中・津島中 大熊中・富岡一中・富岡二中 川内中
避難先で再開している学校 (仮設校舎)	双葉南小・双葉北小 (いわき市で再開)	双葉中（いわき市で再開）

※双葉郡 8 町村が共に取り組む、地域を題材にした探究的な学習活動である

「ふるさと創造学」については、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会ホームページをご覧ください。



浪江町立なみえ創成中学校 校長：青田 亮一

開 校：平成30年4月1日

(小中併設型の新設校として浪江東中学校を改修して設立)

現所在地：浪江町大字幾世橋字来福寺西73

在籍生徒数：24名(令和6年10月1日現在)



1 本校の現状

開校7年目、生徒数は24名、「自立と創造～自ら問い、自ら学び、自ら創る～」を重点目標として日々の教育活動を展開しています。開校以来、力を入れて取り組んできている「ふるさと学習」では、地域の方々のお世話になりながら、毎年成果をあげてきました。本年度はこれまでの学年合同による活動から、いよいよ学年単独での取組に挑戦です。

系統性を持たせた学年ごとのテーマ、1学年「知る」、2学年「学ぶ」、3学年「創る」を軸に、生徒・担任・副担任がチームとなって課題解決に臨んでいます。長年取り組んでいる「哲学対話」の手法を用い、問い出しをしたり、手立てや可能性を広げたりと、対話の内容を可視化するホワイトボードはいつも渋滞。対話と協働による活動が板についてきた様子です。地域密着のこの活動は、常に視線の先にふるさと浪江があり、町の未来につながっているため、ご協力いただく地域の方々も期待を寄せています。これまで多くの支援に支えられてきた本校生徒たち。この活動を通して「地域の未来を切り拓き」支えてくれた方々に恩返しができればと思います。

2 本校の特色ある取組

■ 浪江名物“かぼちゃまんじゅう”がソフトクリームに！

- 3学年が総合的な学習の時間で挑戦中の「かぼちゃまんじゅうソフト」づくり。町内のカフェ“SakeKura ゆい”さんのご協力を得て、4月から商品開発と広報、販売に取り組んでいます。商品のイメージや広報、販売についての話し合いをしては現場でアドバイスをいただくことを繰り返し、イメージが徐々に形になってきました。販売の日が楽しみです。

地域の復興に向けた小さな活動ですが、ほんの少し町に貢献できたのではないかと思います。たいへん貴重な経験でした。



【スプーンは生徒のお手製】

■ 哲学対話がさかんになってきました！

- 4月の授業参観では、全学年が哲学対話による授業を展開しました。中でも1学年は保護者も対話に巻き込んでしまいました。

今回の問いは「なんで人は怒りの感情を覚えたのか」。この場で思いついたこと、普段思っていること、感じていることが次々と出てきます。哲学対話は、まずは発言を受け入れることがルールです。互いに思うところはあったと思いますが、愚痴ではなく、対話のおもしろさが味わえたのでしょうか？



【保護者も参加 哲学対話】

葛尾村立葛尾中学校 校長：横田 和典

旧住所：双葉郡葛尾村落合菅ノ又14

再 開：平成25年4月1日（旧三春町立要田中学校で再開）

平成30年4月1日（葛尾小学校で再開）

現所在地：双葉郡葛尾村大字落合字西ノ内50番地

在籍生徒数：5名（令和6年10月1日現在）



1 本校の現状

今年度の重点目標は「スモールステップで グレードアップ！」です。本校生徒会会長が昨年度末に発言した「もっとグレードアップした自分達の姿を村の人に見せたい」という熱い思いを職員が受け取り、応援しつつも「焦らず弛まずスモールステップでね」との願いを加えて設定しました。

この重点目標を軸に、極少人数学校のよさを最大限に活かした「葛尾中ならではの教育」の確立をめざし、生徒・職員・地域の方々と保護者が対話と協働を繰り返しながら取り組んでいるところです。

7月に実施された修学旅行では、「日米草の根サミット」に参加しました。「外国の方との交流が心配」との生徒の思いを受け、インターネット掲示板を活用した事前交流を行いました。生徒自身や葛尾村、福島の名産を紹介する動画を作成し、当日の参加者からコメントをいただき、交流を図りました。その甲斐あって、当日はスムーズに交流を楽しむことができました。以前よりも英語、そしてコミュニケーションに自信が出てきたようです。

今後も、対話と協働を通して生徒一人一人の自己実現を果たす学校を目指します。

2 本校の特色ある取組

■ 国際交流の体験を通してコミュニケーションを学ぶ

- 修学旅行を活用し、和歌山市で開かれた「日米草の根交流サミット」に参加しました。アメリカ人約20名と高野山を巡り、観光と英語での交流の両方を楽しみました。前述の事前交流の効果もあり、生徒は質問にも積極的に答え、また、食事の時間にはアメリカの方の隣に座り精進料理を食べながら会話を楽しむなど、交流を深めることができました。英語でのコミュニケーションに自信を持った生徒達は、英語弁論大会に進んで参加し、「この表現は相手にどのように受け止められるのだろうか」ということを意識しながら練習に励むなど、和歌山での体験を次の学びに生かしていました。



【アメリカのご婦人の話を真剣に聞く生徒】

■ 生徒も教師も哲学対話を楽しむ

- 6月には哲学者の永井玲衣様のコーディネートにより哲学対話に取り組みました。対話のテーマは、毎回生徒自身で決めるのですが、今回は次のようになりました。

「なんで人間って自然を守ろうとするのか。そして、なぜ守れないのか。」

1年生も教師も、同じ立場で話ができるのが哲学対話のいいところです。「自然を守ることができない人は、具体的に何をしたら守れるのか分かっていないのでは?」「夜などは自然が怖いときがある。美しいと怖いの違いは何なのか」など様々な発言があり、全員が真剣に、しかし対話を楽しんでいました。

今後は、永井様のご助言をいただきながら「哲学対話の手法を生かした授業」に挑戦する予定です。また、今年度も、なみえ創成中学校様のご厚意により、学校の垣根を越えた哲学対話の授業に参加させていただきます。



【生徒も教師も一緒に対話】

双葉町立双葉中学校 校長：新田 勇雄

旧住所：双葉郡双葉町大字新山字東館 1

再 開：平成 26 年 4 月 1 日（旧銀行支店跡地で再開）

平成 26 年 8 月 11 日（仮設校舎に移転）

現所在地：いわき市錦町御宝殿 5 6

在籍生徒数：17 名（令和 6 年 10 月 1 日現在）



1 本校の現状

震災後 3 年間の休業を経て、平成 26 年 4 月にいわき市錦町の仮設校舎で学校が再開してから、11 年目となります。この間、延べ 100 名の生徒が卒業し、それぞれの進路で頑張っています。今年度の学校重点目標は「自ら目標を決め、努力した結果を次につなげる生徒」の育成です。変化が激しく、先の見通せない現代を生き抜いていくために、自分がやりたいことを見定め、そこに向けて努力を重ねることができる力、自己マネジメント力を高めさせるべく、教職員一丸となり取り組んでいます。

双葉町は一昨年夏の夏に住民の帰還が実現しました。町での学校再開に向けては昨年度、学校教育基本構想が完成しました。目指す学校は「わたしの学校」、「みんなの学校」、「つながる学校」、「そなえる学校」です。ふるさと創造の学校づくり、復興のシンボルとなる学校づくりです。目指す学校の具現化にむけて、今年度は基本計画ができあがる予定です。

8 月には友好町である京都の京丹波町との子ども交流事業に、生徒 9 名が参加し、京丹波町を訪問しました。京丹波町の伝統文化体験や、お互いの町の様子を伝える発表交流会等を通し、双葉町に対する支援を直に感じるとともに、双葉町の復興について広い視野から考えるよい機会となりました。

町での学校再開までまだ仮設校舎での教育活動が続きますが、少人数教育の強みと、関係諸機関との連携を生かし、多様な経験を通し、自己マネジメント力を育てていきたいと思えます。

2 本校の特色ある取組

■ 職場体験や他校との交流を通してふるさと双葉の未来を考える

- 昨年、震災後初めて双葉町で職場体験を行い、今年度も双葉町で職場体験等を行いました。1 年生は職場を訪問し、双葉町で働いている人の思いを伺いました。2 年生は職場体験を行い、働くことのやりがいや苦労とともに、双葉町で働くことの意義を学びました。3 年生は双葉町役場を訪れ、これからの町づくりについての質問や中学生が考えた観光業の提案を行いました。町を訪問し直接見聞することで、そこに暮らす人々や働く人々の思いを理解し、将来もふくめ、どんな関わりができるかを考える機会となっています。いわき市に学校がある現在、双葉町を訪問する機会を多く設けることは難しいですが、ふるさととの関わりを様々な形で模索していきます。

町と友好町である京都の京丹波町との子ども交流事業では、互いの町の様子を発表し合ったり、学校を挙げて中学生が継承している人形浄瑠璃や和太鼓を体験したりしました。他の町を知り、比較することで、双葉町の特色やよさ、継承していかなければいけない伝統文化、将来の双葉町の姿について考えることができました。

■ 幼小中合同での行事

- 毎年度 4 月に幼小中合同で入園、入学した園児、児童、生徒の歓迎のためのふれあい集会、3 月には卒園、卒業生に感謝を伝えるありがとう集会を行っています。他にも避難訓練や防犯教室、クリスマスパーティーなど、同じ校舎で教育活動を行っている利点を生かしています。幼小中の園児、児童、生徒が行事を通して交流する中で、園児や小学生は、お兄さんお姉さんとのふれあい、中学生は小さい子の面倒を見るなど、優しい気持ちを育めるよい機会となっています。



【職場体験（上）・浄瑠璃体験（下）】



【ふれあい集会】

富岡町立富岡中学校 校長：武内 雅之

住 所：双葉郡富岡町小浜字中央237-2

統 合：令和4年4月1日（再 開：平成30年4月1日）

在籍生徒数：22名（令和6年10月1日現在）



1 本校の現状

三春校の閉所、2校の統合から富岡中学校が開校して3年目を迎えました。生徒数は22名と横ばいではありますが、併設型連携校の富岡小学校の児童数の増加から、中学校の生徒数も今後着実に増加していくことが予想されます。

こうした中、富岡町教育委員会の掲げる「コミュニティの拠点となる学校」をめざし、「夢の実現に向けてねばり強く努力する生徒」の育成に向け、一人一人を見取り、個にしっかりと寄り添いながら教育活動を展開しています。先生方や保護者からの相談に誠実に対応し的確なアドバイスをする教頭先生。昨年度の反省を生かし行事等に改善を加える先生方。子どもたちに親身に寄りそう支援員や町職員。そして、学校の一番の応援団である地域の方々。教育委員会をはじめとする関係機関。それぞれが子どもたちの「夢の実現」に向け、着実に前進しています。

「地域を愛し、地域に貢献できる生徒」の育成のため、今後も「チーム富岡」が一体となって富岡中学校をさらに育てていきたいと思います。

2 本校の特色ある取組

■ 小中併設型連携校のよさを生かして

- 小中併設型連携校のよさを生かし、教職員は小学校への乗り入れ授業や相互の授業参観、合同での現職教育、生徒は合同での行事や休み時間の交流等、連携の機会を積極的に取り入れています。特に、運動会や学習発表会、安全関係の行事においては、生徒が児童を支え、チームを組んで活動しています。また、生徒指導においても、転入学以前の生活状況や現在の生活環境等、共通理解のうえで指導できるよう実態把握や課題を共有し、切れ目のない指導を行っています。



【1年生の手を引いてゴールへ】

■ 富岡ならではの教育の推進

- アーティストや職人など、各界のプロフェッショナル転校生が学校を仕事場として、子どもたちと共に生活しながら活動する「PinSプロジェクト（教えない教育）」は今年6人目の転校生を迎え、子どもの「観察・洞察力」や「発想力」を見出す取り組みを行っています。また、「EIP9プロジェクト」ではさまざまな外部講師やゲストコーチを迎え、小中9年間を見据えた健康増進・体力向上を目指し取り組んでいます。今年度は、陸上・ダンスなどの講師を招いてご指導いただきました。



【グループごとのダンス発表】

■ 地域との連携、伝統文化の継承を

- 校内に地域交流室を設置し、地域のクラフト教室や読み聞かせ関係の団体が利用しています。学校の要請に応じて、生徒とともに活動したり行事等へ参加・協力をしたりしてくださっています。さらに、月一回の「地域交流カフェ」においては、地域住民や保護者等と生徒・教職員がふれあう場となっています。また、震災前から続く小浜風童太鼓、よさこいの指導を地域の方に依頼し、運動会や文化祭を発表の場として、町の伝統文化をつないでいます。



【地域の方を招いての太鼓練習】

檜葉町立檜葉中学校 校長：松本 涼一

住 所：双葉郡檜葉町北田字鐘突堂2-1

再 開：平成24年4月6日（いわき市湯本仮校舎で開校）

平成26年1月1日（檜葉町小中学校中央台仮設校舎へ移転）

平成29年4月1日（檜葉町本校舎へ移転）

在籍生徒数：66名（令和6年10月1日現在）



1 本校の現状

檜葉中学校は平成18年より、中高一貫でのサッカーエリート育成に取り組むJFAアカデミー福島（女子）の生徒を受け入れてきました。震災後、アカデミーは一時的に静岡県裾野市に活動拠点を移しましたが、この4月、檜葉中学校への完全復帰を果たしました。北海道から沖縄まで、全国各地から集まったアカデミー生徒たちは、親元を離れて寮生活を送りながら、目標に向かって懸命に努力しており、その姿には強い意志とたくましさを感じられます。

また、檜葉町の生徒たちは、地域と連携したキャリア教育を通じて、ふるさとの良さや、学校での学びと実社会とのつながりについて学んできました。商品開発の授業では、異学年のグループで協力し合いながら学びを深め、文化祭や東京日本橋での販売体験では、コミュニケーション能力や表現力を高める機会を得ています。これらの「檜葉ならではの」教育活動を通じて、本校では子どもたちに必要な資質・能力の育成に取り組んでいます。

檜葉の子、アカデミー生徒双方が力強い翼となり、切磋琢磨しながら、さらに高く、遠いところへと飛躍していくことを願っています。

2 本校の特色ある取組

■ キャリア教育：模擬会社「Nalys（ナリーズ）」での商品開発と販売体験学習

- 檜葉中学校の生徒たちが運営する模擬会社「Nalys（ナリーズ）」は、震災後にいただいた多くの支援への感謝の気持ちを込めてスタートし、今年度で7年目となります。生徒たちは地元企業や団体と協力し、商品開発や販売活動を行っています。これにより、地域復興への貢献やビジネスの実践的な学びを得ています。地域との連携を通じて、震災後の感謝の気持ちを形にしながら、毎年新たな挑戦に取り組んでいます。



【東京での販売体験】

■ 3Cプロジェクト：第一線のアスリートから学ぶ

- 本校では、子どもたちの運動能力向上や健康増進を目指し、3Cプロジェクトに取り組んでいます。3Cとは下記の通りです。
Change - 新たな自分の可能性を発見する。
Challenge - （することで）運動能力の向上を目指す。同時に心も鍛えることで心身の調和を図る。
Connection - 運動の楽しさをつないでいく。人と人とのつながりを大切にする。

今年度は陸上、ラグビー、ダンスなどの講師を招聘しております。第一線で活躍する方々の指導を受けることで、子どもたちのキャリア形成にも役立っています。



【3Cプロジェクト

ラグビー授業】

■ 防災授業：地域と子どもがともに考える

- 昨年度より、地域住民と子どもたちが、災害発生時の行動を共に学び合う「防災授業」を実施しています。今年度も、小・中学生と地域住民、町役場関係各課などが一堂に会し、中学生がファシリテーターとなって、住んでいる地域の防災について話し合いました。今年度、静岡県より帰還したJFAアカデミー福島の生徒には、寮があるJヴィレッジ周辺の震災当時の様子や震災後の避難生活、学校生活の推移について、学校長より特別授業を行い、理解を深めました。



【地域連携防災授業】

広野町立広野中学校 校長：柳沼 敏文

住所：双葉郡広野町大字下浅見川字築地 1 2

開校：平成 24 年 8 月 27 日（本校で再開）

平成 26 年 8 月 25 日（ふたば未来学園高等学校が広野
中学校校舎で開校のため広野小学校北校舎へ移転）

平成 31 年 4 月 1 日（本校舎へ移転）



1 本校の現状

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、マグニチュード 9.0、震度 6 弱の『東日本大震災』が発生し、激しい揺れとともに、推定 9m の巨大津波が発生し、広野町は壊滅的な被害を受けました。また、12 日に発生した福島第一原子力発電所の爆発事故により、広野町は緊急避難準備区域に指定され、多くの町民が県内外へ避難を余儀なくされました。広野中学校は休校状態となり、震災当時 229 名在籍していた生徒も、県内外の学校に避難し、その年の 10 月 1 日に、いわき市立湯本第二中学校で間借りした状態で授業を再開し、翌年 8 月に本校舎に戻った時には、生徒数が約 10 分の 1 の、22 名となってしまいました。現在は 125 名と回復しているように見えますが、実は半数の 54 名が、全国から集まった J F A アカデミー福島の生徒となっています。

本校では『多様性と調和』『優しさと思いやりの心』を大切にしながら、誰一人我慢することなく、笑顔で安心して学校生活を送り、自分の夢や希望に向かい、迷いなく全力で取り組める環境を提供し、今後の広野町と日本の未来を担い、グローバル社会で活躍できる人材の育成に、邁進したいと考えております。今後とも、応援よろしくお願い致します。

2 本校の特色ある取組

■ ふるさとの魅力を探求する総合的な学習の時間

- 3 年間の総合的な学習の時間を通して、ふるさとの魅力を探り、伝え、創る学習を行っています。取材活動を通して、地域の方々の復興や地域振興への思いや取組を直接学び、最終的に「ふるさとの魅力を創る」をテーマに、3 年生が映画作品を作りあげていきます。

講師に「一般社団法人リテラシーラボの千葉偉才也先生（福島大学）」他、東大生や慶応大生にファシリテーターとして、子ども達の学習をサポートいただいています。



■ グローバル人材を育成する教育の推進

- 広野町では、「グローバル人材を育成する教育」の一貫として、毎年 1・2 年生が「ブリティッシュヒルズ」において、異文化交流体験活動を実施しています。ネイティブスピーカーとの、英語での交流を通し、異文化に対する理解を深めながら、語学力やコミュニケーション能力を高めることが目的です。東日本国際大学の留学生徒との定期的な交流や、各種検定試験も全校生で、それぞれの目標に応じて取り組んでいます。



■ 『優しさと思いやりの心』を育てる授業

- 広野中学校では、文部科学省の人権教育開発授業を実施した経験を継続し、『全ての生徒が笑顔で安心して学校生活が送れるように』毎年、生徒会が中心となって『いじめ撲滅集会』を実施しています。まず、生徒会が「いじめに関する意識調査」を行い、その結果をもとに、各学級からいじめ撲滅に向けた「スローガン」の発表を行います。集会の中では、何度も『熟議』の時間が設けられ、周りの友達と真剣な意見交換が行われます。



福島県立ふたば未来学園中学校

校 長：郡司 完

住 所：双葉郡広野町中央台1丁目6-3

開 校：平成31年4月（平成27年に開校した高等学校に併設）

在籍生徒数：179名（令和6年10月1日現在）



1 本校の現状

令和6年4月、6期生となる新入生60名が入学し、全校生が179名となりました。生徒は、双葉郡内はもちろん、県内全域、スポーツ選抜生は全国から集まっています。東日本大震災からの教育復興のシンボルとして平成27年に開校したふたば未来学園は、今年度10年目の節目を迎え、中学校は開校6年目となり、1期生が高校3年に在籍する中高一貫教育校の完成年度となります。県内で唯一併設型・連携型中高一貫教育を行う本校は、最新の施設・設備を備えており、地域課題の解決を図る探究活動を展開するとともに、世界で活躍できる人材育成に向けてグローバル教育に力を入れています。実践的英語力を育むため、通常の英語の授業に加え外国人講師や高校教員も教えるグローバル・スタディ科の授業や国内だけでなくニュージーランドでの研修を行っています。

2 本校の特色ある取組（グローバル教育）

■ 英語力を高める授業(全学年)

- 英語力の向上を図るため、英語の授業では教科書を4・5回繰り返しラウンド方式を取り入れるとともに、習熟度別指導と少人数指導を柔軟に行い、AI教材も活用しながら個に応じた指導を実践しています。また、通常の英語の授業に加えて、外国人講師や高校教員も指導する「グローバル・スタディ科」の授業を開講して、英語でのコミュニケーションやプレゼンテーションを行い、読む・書く・聞く・話すの英語4技能をバランス良く高めるとともに、英検準2級の取得も目指しています。



【グローバル・スタディ科】

■ 国内研修施設での学び(1・2年)

- 実践的な英語力を育成するため、普段の授業ではできない海外生活を体験できる施設での研修を毎年3月に行っています。中学1年生は、東京グローバル・ゲートウェイにおいて、外国のような施設でホテルの受付や飛行機の搭乗など、英語を使いながら海外での生活を疑似体験します。中学2年生は、ブリティッシュヒルズにおいて、イギリスを再現した異国情緒漂う施設で英語のワークショップやクラフト体験を行い、テーブルマナーも学ぶなど、楽しく充実した語学研修を行っています。



【東京グローバルゲートウェイ研修】

■ ニュージーランドでの研修(3学年)

- 中学校3年生は、グローバル教育のまとめとして、毎年3月にニュージーランドでの研修を実施しています。海外の連携校であるブロックハウス・ベイ・インターメディエイト校と交流し、福島の現状や探究の成果を英語で発表するとともに、ホームステイやファームステイをとおして、現地の文化や自然を学びます。連携校との交流は、日本から訪問するだけでなくニュージーランドからも来日してもらい、体験授業やホームステイの受入を行っており、オンライン交流等を含め密に連携しています。



【ニュージーランド研修】

大熊町立学び舎 ゆめの森 校長：南郷 市兵

住所：双葉郡大熊町大字大川原字南平2019番1

開校：令和4年4月1日

在籍生徒数：（後期課程）9名（令和6年10月1日現在）



1 本校の現状

令和4年度に義務教育学校 学び舎 ゆめの森が開校し、昨春には大熊町に学校とこども園が帰還して幼児期から15歳、さらには地域の方も含めた100歳までが集い学び合う一体型教育施設での教育活動が始まりました。震災当時1,000人を超えていた町の幼小中学校の子供たちは、町への帰還直前の令和4年度には9人まで減少しましたが、帰還後の現在こども園と学校で合わせて65人（後期課程9人）が元気に生活しています。

原子力災害による避難先の会津の地で、関係者が手を携えてひとつひとつ重ねてきた実践や大熊の教育の伝統、そして大熊中学校の歴史を大切に引き継ぎ、いま学び舎ゆめの森では、一人一人の子供たちの興味関心や「問い」を出発点としながら、唯一無二の「わたし」の物語を創造することを目指し、幼児の「遊び」と児童生徒の「探究」をシームレスに繋ぐ学びに取り組んでいます。円形の図書広場を中心とした雄大な環境に集った、年齢や個性も違う仲間達が互いの違いを力に変えて協働するインクルーシブ学び舎から、子どもも大人も一緒に、みんなで未来を紡ぎ出していきたいと考えています。

2 本校の特色ある取組

■ 学びのマネジメントを基盤とした個別最適な学び

- ひとり一台のタブレットでAI型教材も活用し、自由進度学習も取り入れた個別最適化した授業を全教科で実践するなど、学習者主体の学びの展開を目指しています。
- 長期休業の宿題を自ら設定したり、各自が計画的に自由に使える毎日25分のレベルアップタイムを設けて自ら学習を進めたり、時間割を自ら組み立てたりするなど、学びの自己マネジメント力の育成を基盤に据えています。



■ 持続可能な地域の実現に挑戦する「未来デザインの時間」（総合的な学習の時間）

- 「個人と社会の well-being の実現」をテーマとした個人探究活動に取り組み、自らの「興味」と「問い」を出発点として、大熊の豊かな人や歴史に向き合い、各自が大熊に貢献するプロジェクトを実践し、自らの生き方の創造に繋がっていきます。
- 社会科の公民分野の学習やフィールドワークを出発点に課題解決のプロジェクトを構想し実践する等、探究と各教科の学習の往還による、深い学びの実現を目指しています。



■ 演劇教育～あたらしい大熊の物語の創造と共有

- 専任アーティストが学校に常駐し、年間を通じて自己肯定感や表現力、協働力や創造力等を磨くワークショップに取り組んでいます。
- 毎年秋には、子どもたち・アーティスト・教員が協働しながら、大熊の地域での出会いや共感を出発点とした演劇公演の創造に挑戦し、新しい大熊の物語を紡ぎだし、地域へ共有していきます。
- 誰一人欠けても成り立たず、一人一人の違いが舞台を豊かにする演劇が内包する教育効果が、他者を尊重する資質・能力の育成や学びのコミュニティの形成に繋がっています。



【上】学習対象や方法を各自が選択

【中】開発した商品を地域で販売

【下】地域の方々を招いた演劇公演

川内村立川内小中学園 校長：海老原 篤

住 所：双葉郡川内村大字上川内字沼畑 1 2 5 番地

平成 2 3 年 3 月 1 6 日 全村避難

4 月 1 4 日（郡山市立河内小、逢瀬中で授業再開）

平成 2 4 年 4 月 1 日（川内村で学校再開）

令和 3 年 4 月 1 日（川内小中学園開校）

在籍児童生徒数：7 1 名（令和 6 年 1 0 月 1 日現在）



1 本校の現状

義務教育学校「川内小中学園」が開校して 4 年目となりました。村の宝であり、未来の希望である子どもたちのために、認定こども園「かわうち保育園」も併設され、0 歳から 1 5 歳までの学びの環境が整備されています。さて、ひと昔前の小中連携は、中学校からは「小学校では何を教えてきたんだ」とか、小学校からは「中学校の先生はすぐ大きな声を出して」などと溝があり、名ばかりのものだったような気がします。本校の様子を見てみると、前期課程と後期課程の溝はなく、義務教育学校の良さが随所に見られます。まさに「川内ならではの」教育活動が展開されています。その中のひとつが、給食当番、芋煮会、新体力テストなどでの 1 年生から 9 年生までの縦割活動です。もちろん、何から何まで一緒にやっているわけではありません。この 3 年間の中で、先生方が試行錯誤しながら、身に付けさせたい力等を考え、諸活動や行事等が整備されてきました。また、体験活動が多いことも本校の特色のひとつです。いつでも運行していただける村教委のスクールバス、また協力してくださるたくさんの地域の方々、まさに「チーム川内」として特色ある教育活動が展開されています。今後も本校の強みを生かしながら、たくましく、しなやかな人材の育成に取り組んでまいります。

2 本校の特色ある取組

■ 義務教育学校の良さを生かした教育活動

- 全校生が縦割班となって活動する学校行事・異学年交流の実施
- 生徒指導の情報を共有し、発達段階に合わせた適切な指導
- 後期課程の教員による前期課程への乗り入れ授業
- 部活動の体験入部を 6 年生から実施
- 児童会と生徒会を統一し、5 年生以上が生徒会として活動。
- 生徒会主催行事（縦割班対抗のスポーツ大会、芋煮会等）の実施



【全校芋煮会(10 月)】

■ 地域と共にある学校

- 数多くの体験学習の実施
校内にある地域文化伝承教室「にじいろ」常駐の村職員が地域学校協働本部のコーディネーターの役割を担っており、目的に応じた体験先を調整していただいています。また村教委のスクールバスを常時活用できるため、他市町村の施設等への訪問も非常にしやすい環境にあります。特に地域の方々にはお世話になっており、充実した体験学習活動（登山、田植え・稲刈り・脱穀・もちつき、いちごの苗植え・収穫、そばの種まき・収穫・そば打ち、ブルーベリー収穫、きのこ園見学、職場見学、職場体験等）が実施されています。
- 9 年間の連続した学びによるふるさと学習
村の豊かな自然、歴史や文化、産業等について学ぶことで「川内に生まれ、川内に育ってよかった」という川内っ子の思いを育み、ふるさと川内に誇りをもてる教育を推進しています。
また、児童の発案の「かわうちの郷 かえるマラソン」への全校生での参加や故草野心平先生を偲ぶ「天山祭り」での子どもたちが創作した連詩の朗読を行っています。更に、子どもたちは、村の民俗芸能である「三匹獅子」や「浦安の舞」の継承者であり、稽古を重ね、例大祭や村祭り等で披露しています。



【高塚山登山(6 月)】



【天山祭り(7 月)】



【かわるマラソン(9 月)】